

おばあちゃんの手はまほうの手

天羽 俊輔

「ぼくは、決して、良い子ではないと思う。家族のみんなは、ぼくの顔を見れば、勉強したの？ ダラダラしていないで早く勉強しちやいなさい。」

と、ぼくが何もしていないと決めつけてくる。そのたびに、ぼくは心の中で、うるさいなあ、だまっててくれないかなあとと思う。いつからか、何を言われても、

「うるさいなあ、だまっててよ。」

と口に出すようになった。いらいらしていると、つい、声も大きくなり、らんぼうな言葉づかいになることもある。もう最近では、家族のみんながぼくに何を言おうとしているのかは、ほとんど聞いてなくて、何か言われる前に言い返すようにしている。そんなぼくのことをお母さんが、反こう期と言っているのも知っている。反こう期なんかではない。ぼくの顔を見れば、ぼくが勉強もせずにダラダラしていると決めつけるみんなが悪いのだ。ふざけるなど思っていた。でもこの夏、いつものように、

「うるさいなあ、だまっててよ。」

と言えなくなった。おばあちゃんが転んで右手をこっ折した。いつも、お母さんが仕事から帰るまで、ぼくのために何でもしてくれたおばあちゃんがその日から何もできなくなった。ぼくのことだけでなく、おばあちゃんは、ごはんを食べることも着がえることも、一人で上手にできなくなった。おばあちゃんは、ぼくを見ると、

「悪いわね、ちよつと、ここおさえてくれる。」

とか、何かぼくにたのむたびに、

「ごめんね。めいわくかけるね。」

と言う。いつもなら、何か言われる前に

「うるさいなあ、だまってよ。」

と言うぼくの口は、そんなことをおばあちゃんに言えなくなつた。悪くなんてないし、めいわくなんかではない。おばあちゃんの右手は今まで、ぼくをむかえるために運転したり、おなかやすいたばくにおやつを作つてくれたり、キャッチボールだつてしてくれただ。毎日それが当たり前だつた。だから、ゝありがとうゝなんて言わなくなつた。してもらうのは当たり前で、何か言われるのは大きらいだつた。でも、おばあちゃんのまほうの右手は、ぼくの、何も言われたくない気持ちをこの夏の間、わすれさせてくれた。おばあちゃんを見ると、いたいたしくて助けてあげたくなる。洗い物だつてお茶のしたくだつて何でも手伝おうと思つた。してもらうことは当たり前なんかではない。ぼくを思ううからしてくれる。きつとぼくを思ううから、勉強しなさいと言つてくれるのだと思えるようになった。お母さんは

「あなたの反こう期も夏休みね。」

と言う。夏休みではない、永遠の冬みんだと言ひ返したいが、ぐつとがまんしてだまつていた。おばあちゃん、ありがとう。早くよくなつてね。また、キャッチボールしようね。

評価のポイント

祖母のケガから気づいたことが具体的に書かれており、大人に向けて成長する姿が読み取れた。